

ので、南北朝から室町時代の政治・学芸の歴史に関心を持つているもので、この書物を讀まないものはないと云つてもよいほどである。その内容は、後崇光院が苦心して書き著されただけに、文章は流暢であり、記述は簡潔、史実を正確に伝えている。その点では申し分はないが、後花園天皇がこれを讀まれるいろいろの事情を考慮して、文章の表現を殊更に婉曲にしたところがあり、著者の真意が端的に表出されない点がある上に、著述當時は周知の事実であつて、説明が省略されたことでも、五百年後の今日では容易に明かにし得ないことが多く、それがこの書物の利用を妨げている点もまた少くないのである。

東京大学史料編纂所にあつて多年南北朝時代の史料編纂に従事し、さきに「南北朝史論」の著書で文学博士の学位を得られた村田正志氏は、職務と専門の両方の立場から、樺葉記の記事の解明に努められ、その成果は氏の發表した多くの論文にあらわれているが、三条西家旧蔵の古鈔本を入手したのを機会に、これを底本とし、それに旧伏見宮家蔵の後崇光院宸筆草本三種、東山御文庫など十二種の古

本を校合して、正誤を考証するとともに本文の記事については、出典を明かにして、字義を一々註解し、多くの史料を引用して、史実を明確にして、これを公刊された。これが即ち証註樺葉記である。さすがに多年手がけられたものだけに、考証と云い、註解と云い、間然するところがない。この書の刊行によつて、樺葉記が今後ますます正しく広く利用され、中世の政治・学芸の研究が一層深まることを期待する。

史料の公刊は、歴史の研究を促進させ、成果をあげる基本的なものであつて、戦前に国史研究が多くの仕事をしあげたのも、国史大系を始め各種の史料の公刊に負うところが少なくなかつた。国史に対する関心がひろまつたという点では、戦後は戦前に勝るとも云えない状態である。これは二版二、三千部発行でなければ採算が立たない経済的事情が大きく働いているのだが、その困難をのりこえて、史料の公刊を続行して行うのであれば、折角の国史への関心も、ゆがめられたものとなり、やがては消えて了うかも知れない。紹

介者は著者と多年親しく交際を願ひ、著者が多くの犠牲を払つてこの書の公刊に当られたことを知つてゐるが、この書の出版が機縁となつて、史料の公刊が以前のように盛んになり、もつと徹底的になることを望んでやまない。(本文四四六頁、図版四頁、定価一、五〇〇円、東京宝文館発行)

——赤松俊秀——

### 伏見稲荷大社編

### 稲荷大社由緒記集成

—— 嗣官著作編 ——

本書は去る昭和二十六年にとりおこなわれた伏見稲荷大社の正遷座の記念として出版されたもので、当社の由緒記のうち江戸時代の嗣官の著作七部を収めている。

稲荷大社の史料としては、さきに「稲荷神社史料」(第五卷—第九卷)が公刊され学界に多大の便宜を与えているが、ただかなりの未刊部分を残したまま中絶されているのが惜しまれてゐた。このたび、これとは一応別であるが、新たに由緒記集成が出版されたことは、ただに稲荷大社史の研究にとつてばかり

でなく、日本史研究の多方面にとつて大きなよろこびである。

凡例によれば、本書は当社由緒記の主要なものを祠官著作・一般著作・信仰著作の三篇としたその一として公刊されたもので、編纂にあたられたのは稲荷社史研究に権威ある小島鉦作氏である。

さて取められた七部の著作は、江戸初期から寛政年間にわたり当社祠官秦氏及び荷田氏がその所伝と研究をまとめたもので(秦氏六、荷田氏一)、本宮及び摂社末社の祭神、社殿などに関する文献、及びその解釈、更に社号・御鎮座・神号異説・異名御同徳・神面・命婦などの口伝、また社領・境内・宮殿社屋・神宝・祭礼・神楽などの解説を内容とするもので、記すところ甚だ多岐万般にわたっている。以て当時祠官の間にかやうの研究がなされていたかを窺い得て興味あるが、殊に巻頭の「神号伝并後附十五箇条口授伝之和解」は、

中世以来の秦氏の所伝が近世に入つて大成された姿を示すものと考えられる。引用するところ記紀以下の古典・記録など珍しくないものも多いが、「古伝ニ曰」として記された条

には宗教史・民俗学などにとつて検討されるべきものも含まれているといえる。第五の「稲荷社事実考証記」二巻は寛政初年頃の秦大西親業による由緒研究の草稿本であるが、その広汎精緻なることから、当社由緒研究の一つの頂点とされているものである。巻末第七の「稲荷社由緒注進状」は、元禄七年に祠官荷田家の所伝を神祇伯白川家に注進したものの案文であるが、秦氏と荷田氏とともに当社の祠官家として所伝を異にし対立していた関係から、本書は他の六部と内容を異にするところあり、殊にこれが荷田春満の自筆本である点など興味深いものがある。(当時春満は二十六歳で江戸遊学前であつた。)

以上、本書の内容の極く概略を摘記したにとどまるが、いま所収の七部を更めて列記すれば左の如くである。

神号伝并後附十五箇条口授伝之和解 (寛延三年以前)

水台記 秦毛利公治 (元禄七年)

稲荷谷辨記 秦大西親盛(享保十七年)

便蒙秘記 秦大西親臣 (寛政八年)

稲荷社事実考証記秦大西親業 (寛政年間)

稲荷社雑記 秦大西親業 (寛政七年)

稲荷社由緒注進状荷田伯白春満 (元禄七年)

なお、別に懇切な解題を附し、本文上欄には細かい見出しがついている。

思うに、本書のごとき種類の著作は、近年社会経済的な諸般の事情のために、ほとんど上梓されることがなかつた。いなそれよりも神祇史および民間信仰史の研究に、中世以降のものは珍重するが近世以降のものとはかく軽視するという傾向があつたと思う。しかしそのために近世以降のこの方面の研究が、史料が比較的豊富なるにかかわらず、反つて空白をこのす憾みがなかつたといえないだろうか。本書の公刊はそういう意味で、貴い業績であると考ええる。

しかしそれだけではない。周知のごとく、稲荷信仰はわが国の民間信仰史において重要な位置を占めている。宗教史家・民俗学者はそれを「原型」に溯り追及すべく努力を傾注した。そしてそれはそれでまた意義ある仕事でもあつた。だが、果して私たちは、江戸初期のそれについて、当時の社会全般の中で、どれだけのことを語りうるだろうか。古い形

を追及し、歴史の各時代にはその發願をのみ検証するという仕方からは、本書はあるいは珍しくないかも知れないが、各時代における信仰の役割と変化とについて丹念に探究するために、極めて大きな示唆を与える一つといわねばならぬ。ただ本書は「詞官著作篇」であり、稲荷信仰全体からみれば、どうしても、上部の、理論的述作であり、單純に全般の代表とはいいい切れない。この点からいえば、他の「一般著作」「信仰著作」の二篇が一日も早く公刊され、三篇あいまつてやがて当時の信仰全般の姿が明らかにされるのを切望してやまない。

なお本書としても一つ注意すべきことは、国学の礎を築いたとされる荷田春満については、それは、さきに紹介した春満の自筆本が収録されているという理由からだけではない。また国学を創始する春満の前身という意味からだけでもない。実に春満が、どのような神道説ないし故事研究のなから

現われてきたかという点において、すなわち秦一荷田兩氏の思想上・理論上・考証上の対立が、国学の展開のためのどういう素地あるいは動機をつくつていたかという点において、注意されるのである。国学については私自身よく通じないので詳しいことに論及出来ないが、しかし今日、国学が新しい観点から見直さなければならぬといわれている以上、必ずや本書がその研究の上に寄与するところがあると信ずるものである。神仏習合についての解釈や反駁、由緒・起源を研究する態度、儒説の援用などに、そのことは片々と示されている。

以上、私は、ただ宗教学史、思想史の角度からだけの所感を記したのであるが、その他、故実、制度、地誌、建築、社領など各方面の資料が数多く含まれていることはわざわざ指摘するまでもないことである。しかしそれについては私には詳しく紹介する資格もなく紙数も尽きたからさしひかえることにしたい。

ただ最後に、重ねて史料の出版という困難な事業をなしとげられた稲荷大社の方々に、学徒として深甚なる感謝の意を表して、この粗雑な紹介をおえることとする。(A5版、本文三三九頁、図版一四、昭和二十八年八月、伏見稲荷大社編)

——黒田俊雄——

執 筆 者 紹 介

- |         |                  |
|---------|------------------|
| 佐 伯 富   | 京都大学助教授          |
| 小 葉 田 淳 | 京都大学教授           |
| 田 中 勝 藏 | 徳島大学教授           |
| 浮 田 典 良 | 京都大学助手           |
| 川 端 真 治 | 京都大学大学院学生        |
| 齋 田 豊 之 | 島根大学助手           |
| 押 野 昭 生 | 京都大学大学院学生        |
| 赤 松 俊 秀 | 京都大学教授           |
| 黒 田 俊 雄 | 京都大学大学院特別<br>研究生 |